

たのが、年の頭が五十五六、田舎者風體のお方

「ハイ御免なされや」

「是はお越遊ばせ」

「お前さんとこは、宿屋さんやナア」

「へい、宿屋渡世を致して居ります」

「一人でも厄介になれるかへ」

「へい、お一人さんがお半分さんでも、結構で御座ります」

「お半分と云ふ様な人間がありますかな」

「向ふに躰いさむがほうてますがな」

「イヤ躰でも立つたら一人前や、ハ、ハ、ハ、泊てもらへるかへ」

「どうぞお泊りを」

「一寸金の取引があつて出て來たのやが、五日と思ふて居るが金の事やで十日も厄介になるや解らん」

「どうぞ御裕ゆつりと、これ、且さんのおゝぎをお取りもうせ」

「いや雪駄を履いてますので足は汚れたない、居間は何處じやナア」

「二階へ御案内もうせ」

「且さん、どうぞ此方へ」

「……………パイ、やれ、是れで落着きました」

「且さん有難うさん、お茶を入れましたでどうぞ」

「いや、よばれませう……………御主人、近頃はとうじやナ」

「へい、お蔭さんでぼち、」

「イヤ、何商賣をしてもぼち、なら結構、ハ、ハ、ハ、イヤ今も云ふた通り二萬兩程の取引で出て來たんで、金の事ちやで五日が十日、十日が半月と長引くや解らんでこんな貧弱貧乏しなりい風體を仕て居るので、何ちや知らんと思ふてるぢやろうが、私は因州鳥取在の者で、處では相當金持じや、ハ、ハ、ハ、私の口からこんな事を云ふのもおかしいが、調度此方へ來る一月程前の事や、夜中に若い者がワア、と云ふてるので、何事がおこつたのやと思ふて起て見ると、皆が向鉢巻むかひむすに手に手に割木を持てるので、コレ何うした事じやと聞いたら、且さん納つて御座る所やおません、賊が参りました、何ちや賊ぢや、賊と云へば盗人さんぢやないか、金がほしゆうて御座つたんぢやろう、もし手向いでもして怪我でもしたら何うする、金で命は買へやせぬ、這入つて持ていで貰へと云ふたが誰一人表を開けに出る者が無いので私が庭へ飛び下りて門をはずして大戸を開いて遣つたら、何と賊が十七人どや、と這入つて來よつたんや、夫れから金藏へ案内したらさあ運びよつた運びよつた、